

---

# 雨の死神

鶲鴉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨の死神

### 【Zマーク】

Z2926Z

### 【作者名】

翳鴉

### 【あらすじ】

雨の日に一人立っている少女。そんな所に幼い少年が傘を渡してくれた。

そして10年後…。

## プロローグ

ある雨の日

。

「…誰も、僕の事を信じてくれない。」

雨の日

。

「…世界が無くなれば良い。」

雨の日

。

「…人間など…所詮…。」

少女は一人、雨の中を歩いていた。

「…ちょっと、お姉ちゃん。」

「…？」

「…？」

幼い少年は少女に話しかけてきて、傘を渡した。

「お姉ちゃん、風邪引く。」

「…なぜ…？」

「…」

「…だって、母ちゃんも父ちゃんも人には優しくしちゃって？」

「…？」

「…うか。」

「…じゃあね。」

幼い少年は雨の中を走つて行った。

そして、少女はどこかに消えていつてしまつた。

「…雨が好きな人間はいるのだろうか…。」

## 1句 口音変化

「要ー もつ もと起あるー。」

ガラツー ガラツー！

女の人が部屋のカーテンを開ける。

「ん？……」

ベッドには、少年が寝ていた。

「要ー もつ もと起きなさいー！」

「… 今何時？」

「 7時45分よ。」

「… ふわあー…。」

少年は用意を始める。

「朝ー」はんできてるから。」

「ん。分かった。」

少年はあいまいな返事をする。

少年の名前は『時雨』しぐれかなめ 中学2年生。

要の中学校は学ランではなく、高校生などが着る制服でいいらしい。

「はい、要。お弁当ー。」

「ありがとな、ねえちやん。じゃあ行つてくる。」

要は口にパンをくわえて家を出た。

要はとても、マイペース。

「 ……。」

「つわあーんー。」

子供が道中で泣いていた。

「ん？… どうした？」

「お母さんがいなくなつたの。」

「さうか、じゃあお兄ちゃんが一緒に探してやるよ」二ノ口シ

「ありがとう!」

そして、要は子供の母親を見つけて、学校に向かう。

時刻08:10

。

「…ん？あつ」

要は道に落ちてる「ミニ」を公園の「ミニ」箱にまで入れる。

「はあ…今日も平和な日常だなあ~」

要はとても親切?というか、そう言ひつ“正義感”がある。

「あつ…遅刻するな。」

要はパンを全て食べる。

そして、いつものように、登校する。

「ふわあ…眠い。」

「おつす!時雨!」

「ん?…澤倉?なんだ?」

「相変わらずだな。お前は。」

「??。」

「いいから、わざと行かないと遅刻するぞー!」

「知ってる。」

要は成績優秀、女子にも男子にもそこそこ人気者。先生にも頼られる事が多いが。

あまりのマイペースに結構ウザがられる事もある。

ガラツ

教室に入り、席に着く。

要の席は窓際の一番後ろの席。

「時雨君！ここ、教えてほしいの。いいかな？」  
「ん？別にいいけど。」

要は誰にでも親切で優しい。

タツ。

「…雨が降つてない日は嫌いだ…。」

電信柱の上に立つ少女、小さな傘を広げていた。

「雨。」

「雨がどうかしたの？時雨君？」

「いや…。」

要は窓から外を見る。

ガラツ

「……要…！…！」

「ん？」

「バコンツ…！」

「！？…。」

「時雨君大丈夫？」

いきなり要が少女に殴られる。

「痛ツ…。」

「あんたね！告白されてもっと言い方とか無いわけ…！」

「…呉羽？…。」

「聞け！！人の話！」

少女の名前は『 笹野呉羽』 要の幼馴染。

「何？…。」

「昨日、告白されたんでしょう。なら、断る言ひ方を考えろ……。」

「……まあ……悪かったよ。」

「……私は謝られても困るし……。」

要は素直に謝る。黒羽は頬を赤くして目をそらして言ひ。

「俺に告白しても、意味無いのに。」

「えつ？どうしてよ？」

「俺、幼い頃からずっと思つてゐる人がいるしな。」

「……？」

「えつ…………！」

クラス中、全員が驚いていた。

「？？」

「……時雨要……。」ボソッ

少女は、傘の持つところに書いてある名前を読んだ。

## 2句 始まりの出会い

「…匂づ。」

少女は突然電信柱から消えた。

ドクンッ！

「！？…。」

「時雨君？」

「あついや…なんでもない。」

要は少し顔色が悪かつた。

なんだ？今の違和感…。

そして、空は曇り。

やがて、雨になつた。

「雨だ、天気予報と違つ。」

「…雨…。」

ドクンッ！

「！？…。」

『…人間とは、珍しい物だ…。』

』

「…お前は誰だ！」

「…お前は誰だ！」

「…えつ？時雨君？」

「あつ…」めん。 「

要はそつと教室から出でていった。

「見つけた。」

「えつ…?…。」

要が廊下に出来る、そしたら窓から化け物が要を襲う。

「…?…。」

スツ！

「なつ…?…。」

「居ない。」

化け物は消える。

タツ

「…平氣か?…。」

「あつ…おつ。」

「…あまり、浮かれていると喰われる…。」

「喰われる?」

「…呆れる、まあいい。」

傘を持った少女は呆れた顔をする。

「お前は?誰だ?」

「…雨神。」

「…なんで俺雨降つてるので、ぬれてないんだ?」

「…それは私が神だから。」

「神?」

「見つけた。」

「…チツ…。」

雨神は要を抱えて、飛ぶ。

「なんだアレ！」

「あれば、”死魔”<sup>カク</sup>能力を持っている人間を喰う。」

「何！？…。だけど俺には能力なんて…。」

「…ある。かつて私がお前に授けた能力。」

「はあ？」

タツ

地面に着地して、走る。

「…雨、突き刺され。」

雨神が傘を化け物に向ける。

そして、雨は氷のようになるとがる。

そして、化け物に突き刺さる。

「グワアアアアアアアアアアアアアア！」

化け物から、血が大量に出てくる。

「…逃げるぞ。」

「あつ！…。」

「…人間は本当に哀れだ。」

「…。」

『お姉ちゃん、濡れちゃうよ。』

なぜだ…なぜ、歳を取つていない。

「…再生を始めたか。」

「えつ？」

化け物の傷は全て再生する。

「 わうわう、 田舎者め! 」。

卷之三

「我其無以圖汝而止」

我に花  
雨衣衣  
の空  
我の衣  
花

雨が住む物は隣に注ぐ

「アーティストの反響」

「えっ?  
……神だらうあんた!」

「私は、お前こ力をあたえ、

「！？○」

וְהַבְּרִיאָה וְהַבְּרִיאָה וְהַבְּרִיאָה וְהַבְּרִיאָה וְהַבְּרִיאָה

ドクンッ！

！」  
。

要の様子がおかしかつた。

『人間、力がほしいと思わないか?』  
『ほしいよ、誰かを守れるようなそんな力が。』  
『なら私がやろう。また10年後その力は發揮される。』  
『お姉ちゃんと出会うか分からぬよ?』  
『…それもそうだな。』

「！？… 雨神とであつたあの日…俺は死神になつた！」

# 3句 死神から貰つた力

「… その力は何でも出せる力。」

「何でも？」

「…要が望めば何でも出る。」

分かつた。

要は集中する。

俺が望む…俺は、死魔を倒す力がほしい。

「はあ？」「。

卷之三

四百六

雨宿た要はキノコを喰ふ

ドクンッ！

۱۰۰

「……」

「……………腰にかけては、いつでもいいよ。」

「やうかへ。まあ此いー。」

カクニン・リード・マネジメント

「お前の力を發揮しろ。」

「分かってる！！」

## 要は鍵を強く握る

ジヤキッ！・！・！

死魔は真っ二つになつて、血を流して倒れて消えた。

「せ、たのつか？」

……ああ、よくやった。

卷之三

雨伸び然ちやがみ一。

「大丈夫だ、ただ力を使いすぎただけだ。」

גָּמְנִיְתָן־בְּנֵי־עַמּוֹן

雨神は立ち上がる。

「…それで、要は家に帰るのか？」

あ、お、雨神は？

「和は家など無いだ」

○ 二二二 一九四〇年九月

蜀漢志

「無事ハニードア開ケテ入リテ、内ニテハトドケル」

「別に、気に入つただけで」。

「いいから、さっさと帰れ。私は要の

「ほーほー! じゃあな! 鬼神! 」——口笛

- 1 -

そして、傘が無くなつた途端に、雨神に雨が掛かつた。要を見ると、まつたく濡れていなかつた。

「……傘がないと、自分自身じゃ いられない……。」

雨神の体が少し震えているように見える。  
そして、いつしか雨神は消えていた。

「……。」

あの時も、何も無い私に、あの子供が話しかけた。

こんな化け物みたいな私に、傘を渡してくれた。

嬉しかった。

こんな人間もいるんだなって思えて……。

「要…。」

雨神はビショ濡れになりながら、一人で歩いていた。

ガラツ

「ん？…。」

5時半ちょっと前に、要の部屋の窓が開いた。

タツ…。

「…誰？」

「…雨神。」

「何！…って…何してるんだよ…。」

「…傘を返してくれないか？」

「あつ…はい。」

要は雨神に傘を返した。

「…邪魔したな。」

雨神は窓から出て行つた。

「なんだつたんだ？…。」

要はベッドに寝転がる。

タツ

「…ん？なんだ、死魔か。」

雨神の目の前には、一人の少女が居た。

「！？…。」

「ふわあ…眠い。」

「…いつてらっしゃい。」

要は、いつもよつ早く学校に向かつた。

ブーッ！！！

バイクが要をひひりつとする。

「……。」

タツ

要が軽くよけた。

「あぶねえーの。」

要はそのまま気にせず学校に向かつた。

そして、なぜか学校には、いつもより早くついた。

「……ハア……ハア……グツ……。」

タツタツ

要が階段を上がる。

「……私では倒せない……。」

ガラツ

「……？……。」

「……要……。」

「雨神！……」

要の目の前には、壁にもたれて肩から血を流してゐる雨神だった。

「雨神、何が合つた！」

「……すまない、私は……。」

「雨神……。」

「見つけたよ。雨神ちやあ～ん」一コツ

「……？……。」

「えへへへへ」一コツ

一人の少女が微笑みながら槍を投げる。

グイッ！！

ドスッ！！

「なつー？あつぶねえー。」

「…要…。」

学校半分がなくなるほどの威力だった。

「当たらなかつたかあー」ニコッ

「お前誰だ！」

「私？私は、亞隈あくま。」

「亞隈？…。」

「そう、死魔とは違つて人型で力も能力も違つ…！」ニコッ

「…要、逃げる。」

「何言つてるんだよ！お前はどうなるんだよー。」

「…あいつは、お前が勝てる相手じゃない…。」

「雨神！俺を信じてくれ。」

ドクンッ！

「！？…。」

雨神はそのまま、気を失つてしまつた。

スツ

「あれ？君が相手？」

「そうだな、俺は時雨要！」

「そつか、私は亞隈のナクル。」

要は鎧を着て、周りには無限に存在する刃が出ていた。

## 5句 不幸な日々？ 2

カキンッ！――！

「チツ！」

「やるねえ～、死神に力貰つてここまでできたの、君が初めてだよ  
二コッ

「余裕こいでると、後で知らんからな――！」

ドスツ！

壁に刀が刺さる。

「貰つた！！」

「……。」

「何！？」

刀がナクルに襲い掛かる。

「なんてね。」

「！？。」

「氷線氷刃！――！」

刀が全て凍り、粉々になってしまった。

「……。」

「君はおしい。だけど倒せない。」

「俺は、雨神を守るそれだけだ――――！」

「その正義を壊してあげるよ――！」

「雨の刃。」

グサツ――！――！

「！？なつ……。」

ナクルに雨の刃が刺さつた。

「雨神！――！」

「ハア……ハア……グツ……私の勝ちだな……。」

「チツ……今日は多めに見てやるよ――！」

ナクルは消えた。

「…ハア…ハア…グツ…。」

「雨神！」

要の術も解ける。

「大丈夫か？」

「…ああ…たいした」とはない…。」

「そうか。」

「…大丈夫だ…。」

雨神はよろよろ立ち上がる。

「…雨よ…幻覚。」

学校全体が元どつりになつた。

「戻つた？」

「…私の幻覚…だが、私が死ねば解ける。」

「…そうか…。」

「…学校の時間だ…私は行く。」

「雨神！」

後ろを向いたが、雨神は消えていた。

雨神…ごめん。

「…要…。」

「…ニニニニ。」

「うつそ…。」

吳羽は自分の席で寝ている要に驚いていた。

「ん?…どうした?吳羽?」

要が田を覚ます。

「どうして！－いつもなら、私が一番なのに－－！」

「…別に、気分気分。」

「何よ！－告白とかされてるからっていい気にならないでよ－－！」

呉羽は頬を赤めて強めに言つ。

「…そうだな…いい気になつてたな。ごめん。」

「…？…な、何よ！－それで許されたと思つてるの…」

「俺は強くなるんだ。雨神を守れるような男に。」

「…？…雨神？誰よそれ！－！」

「別に、呉羽に関係ないし。」

呉羽は要は聞くが要は教えてはくれなかつた。

「…私も、そろそろ、人間觀察をするか…。」

ガラツ

先生が教室に入つてくれる。

「転入生を紹介する。」

「えつ？こんな時期に？」

「入つて来い。」

ガラツ

「…ん？…なつ－－！」

ガタツ－－！

要が驚いて立ち上がる。

「うわあああ……可愛いじゃん……」

「俺タイプ！……」

男子達がとても、興奮していた。

「転入生の、雨神瑞羅さんだ。」

「……雨神瑞羅。よろしく頼む。」

雨神が要の学校に転入してきた。

「ヤバイ……超クールでカッコイイ……」

「じゃあ、雨神は、時雨の隣。」

「……分かった。」

「時雨、教えてやつてくれ。」

「あつ……おつ。」

要は動搖を隠し切れないほど、動搖していた。

カタツ

雨神が席に座る。

「おい、雨神。何してるんだよ。」ボソッ

「……人間觀察だ。要と語る方が好きだしな。」ボソッ

「……？……そつかよ……。」

要は頬を真っ赤に染めていた。

何よ……要の奴……ちやせりあれてるからつていい気に成り上がつて……！……

## 6句 不幸な日々？ 3

「…時雨君、私に学校案内をしてくれないか？」

「あついぜ」——「」

「…ありがとう。」

「ちょっと待った！――！」

要と雨神が教室を出ようとするが、呉羽が止める。

「ん？ どうかしたのか？ 呉羽？」

「…呉羽？」

「俺の幼馴染でこのクラスの委員長だよ。」

「…そうなのか？」

「クラスの事聞くときは呉羽に聞くといこぜ」——「」

「…分かった。やつする。」

「ちょっと一人の話聞きなさいよ――。」

一人の仲を呉羽がさえぎる。

「なんだ？」

「…呉羽さん。」

「何？ 雨神さん？」

「…この頃妙に苛々するか？」

「えつ？ まあ、うん。それがどうした？」

「…あつ別に、何でもないぞ。時雨君、案内してくれないか？」

「了解。」

そして、二人は教室を出た。

「あの一人、仲いいよねえ。」

「出来てるんじゃない？」

「だけど、委員長いるでしょ？ 」

「二股？」

「ああ…………もづ……鬱陶しいのよ…………」  
呉羽は教室で叫ぶ。

「さつき、何か見えたのか？」

「……あの呉羽という人間、死魔にとりつかれてる。」

「はあ！？」

「……早く、倒さないと、呉羽は死ぬぞ？」

「！？……駄目だ！呉羽は死なせない！必ず、俺が守つてみせる。」

タツ

「！？……」

雨神が急に右足を地面につけて、頭を下げて言つた。

「……それがあなたの覚悟なら、私は一生あなたの物になります。」

「！？……サンキュー！雨神！」二コツ

まつたく……人間と言つ物は……。

ドクンツ！

「？！……」

「委員長？？」

「何？……苦しい……要……助けて……要……」

バタンツ

「委員長！？」

呉羽が教室で倒れた。

「…現れた。」

「急ぐぞ！…」

雨神と要は教室に戻る。

ガラッ！

「…？…。」

「はははははははは…！…楽しいわ！…」

「呉羽！…」

「ああ？…」

呉羽は血だらけだった。

そして、呉羽の周りには死体がいっぱい倒れていた。

「呉羽？…。」

「…貴様、人間ではないのか？」

「ははははは、私の名は亞隈の呉羽！…。」

「亞隈？…呉羽が？…。」

「…要、戦わないのか？」

「俺は…倒せない！」

「…貴様の覚悟はそんな物だったのか…。」

「死ねばいいわ。」

呉羽が帽子から、無数の人形を出す。

そして、人形は武器を持つて要に襲い掛かる。

「…！…！」

グサツ…！…！…

「…？…。」

「…貴様は…私が…守る…うつうん、守りたい…。」

「…？…雨神…。」

ドクンッ！

「はははははははは……血だ！……」

ドスツッ！！

—  
! ?  
:  
—

呉羽が雨神の体を素手で刺す。

！？ だハッ！

## 雨神は血を吐いた

「雨神。」

上卷

バタンツ。

! ?

卷之三

## 7句 守る人

雨神が！…。

「雨神！…おい！」

「ははははははは、死んじゃったー！」  
「ヤッ

ドクンッ！

「！？…」

俺が助けてもらつた…。

ドクンッ！

俺は守れなかつた…。

ドクンッ

「…俺は…」

「…守つて…見せてくれ…」

「！？…雨神。」

「…貴様の…力を…」

「…分かつた！俺は、守る！」

ドクンッ！…！…

俺に力を、誰もかもを守れるようなそんな力を俺にくれ！…！…

「…グッ…」

雨神はよろよろ座り込む。

血はもう止まっていた、傷は遅いが治り始めていた。

「…やはり…貴様は…選んで正解だつたな…。」

そして、要の田の前には。

「！？…これは？…。」

銀色に光る刃が出てきた。

「…それが、要の武器になる。」

「俺の？」

「…そう、だから…もう何も恐れるな。」

「！？…分かつた！…！」

「死ねばいいのになあ～か・え・る…。」

呉羽は巨大なかえるを出す。

「なつ！？デカツ！…！」

要は武器を取る。そして構える。

「…できる。」

「守つてみせる…。」

かえるを炎を吐き出す。

「…我、死神の力を宿した人間に属性の力を…。」

そして、要の刃が光つた。

「なんだ！？」

「…要は炎を使う、剣士か、合つて<sup>きし</sup>いるな。」

「俺は、守る！そのためなら…！…！」

「グワアアアアアアアアアアア…！…！…！…！」

かえるがはいた炎が要達の田の前に来る。

「氷炎華！――！」  
ひょうえんか

氷と炎が混ざり合った攻撃がかえる事吹き飛ばす。  
「――？まあ、いつか。今日はここまで。バイバイ」  
呉羽は消えた。

ヨロツ！

バタンツ！

「……要！」

要は武器を消して、倒れる。

「エヘヘ、俺守れたかな？」

「……守れたよ、私を守ってくれた。」

「そつか……。ＺＺＺＺ」

そのまま要は眠ってしまった。

人間はいつも可愛いものなのだな。

タツ

— } } }

ロリータ系の服を着て、鼻歌を歌いながら歩いている少女が居た。  
「 韋ぐ 」 機嫌のようだな。

三 何 は 桜 女 の 事 が な

「！？：。」

少女が驚き止まる。

「うつせな!! お前に何がわかる!! この可愛い服を見ろ!!」

「ん？ なんだ？ 雨神？」  
二人の声に目覚める、要。

「うへ、國典二の廿二

「 分かつた。」

そして、窓を閉める要。

「誰だ？」

「……私の契約者だ。」

「マジかよ!」

「うるせーな！女装してる男に誰われたくないー！」の「変態ー」「変態だとー」の俺を変態呼ばわうするとはーなんという奴ー！」

「……」んな奴ですけど。」

「相変わらずむかつくな……」

「...」

ガチャツ

「ん？誰だ？その女の人は？」

「…要、気にするな。」

「…？まあ、いいけど。」

「…後、女は男だ。」

「…？マジで！」

「…零神という、私と同じ神だが、私は死神だから私のほうが強いという事だ。」

「はあ！？あたしの方が強いわよ！」

「…何、女口調にしてんだよ、てか胸ないな。」

ギクッ！

「！？…別にいいじゃない！何よ！あんたがでかいからって！」

「…誰もそこまで言つてないが。」

「…？…何よ！胸が小さくて悪いわね！」

「…お前男だろ？胸無いか、あるかでお前は到底無いだろ？男だし、な、要。」

「えつ？…俺に振る？」

「…悪かつた、なんでもない。学校に行くぞ。」

「おう。」

「…うして、零神をおいて一人は学校に行く。」

「雨神！あんたの、契約者よりあたしの契約者の方が強いんだからね！？」

「…嘘をつくな。」

ムカツ！

「何よ！…もう…！」

そして、零神は消えた。

「なんだ？それ？」

「ああ、神は全員契約者を見つけるんだ。」

「そうなのか？」

「…私の契約者は要。契約者が強くなれば、神も強くなるといつ事だ。」

「ふ〜ん。」

「…まあ、今日の夜は、神の鼎の日だから、神の世界に行くぞ。」

「はあ！？マジで！？」

「…そうだ。お前の力を見てもうつ審査だ。」

「…？…う。」

要はとてつもなく不安な顔をする。

「…覚悟と自分自身の信頼と私を信じろ。」

「…？…わ…分かった。」

「…それでいい。」

要は頬を赤くして納得する。

「雨神に負けないでよね。」

「知ってる、俺に任せれば。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2926z/>

---

雨の死神

2011年12月20日17時55分発行